

生もみじ

★にしき堂

広島・備後

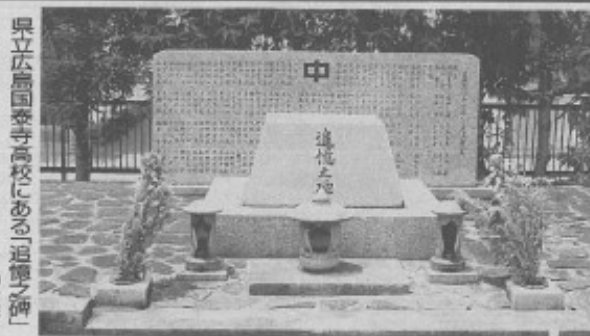
支局長からの手紙

被爆体験の継承とは、追憶のリレーを不断の努力でつないでいくことなのでしょう。母校の県立広島

島國泰寺高校(中区)で7月26日にあつた原爆死没者慰霊祭に参列し、そんな思いを強くしました。

旧制広島第一中学校だった75年前、教職員16人と生徒353人が犠牲になり、正門近くに建つ「追憶之碑」の前で毎年7月第4日曜日に慰霊祭が営まれてきました。30年以上前の在学当時には参列したことはなく、前回広島に勤務していた8年前に同窓会を手伝ったのが初めての関わりでした。銘板に刻まれた故人の名をなぞる遺族の方々と接し、肅然としたのを覚えていきます。

新型コロナウイルスの影響で各地で催しが中止や延期を余儀なくされ、母校の慰霊祭はどうなるのだろうか。開催が1カ月後に迫っていた6月末、同窓会の事務所を



県立広島國泰寺高校にある「追憶之碑」

＝中区で

追憶のリレー

訪ねると、事務局長の久保木敬子さんは「ご遺族や同級生の『出席は今年が最後かも』というお気持ちを考えると中止はできません。規模を縮小してでも何とか開催できるように準備しています」とのことでした。犠牲になつた生徒の親世代は数年前から参列がなくなり、当時の在校生で存命の方も既に80代後半になっていきます。

コロナ対策で椅子の間隔を広げ、検温要員や消毒液も用意。参列者の献花は閉式後に回して時間を大幅に短縮し、吹奏楽の演奏もやめて歌は伴奏なしで…

…。当日の参列者は約90人で例年の3分の1以下でしたが、曇り空の下での慰霊祭を終えた久保木さんは「開催できて本当に良かった」と安堵の表情でした。これまでになく試みもありました。

【広島支局長・宇城昇】
タイトルの題字は員原司研氏